

日本語を第二言語とする 英語母語幼児のテンス・アスペクト習得

—アスペクト仮説の普遍性の検証を中心に—

橋本 ゆかり

1. はじめに

テンス・アスペクトは、習得がむずかしい文法項目の一つとされている。自然な環境で、テンス・アスペクトは、どのように習得されていくのであろうか。動詞と動詞形態素のもつ時間性の結びつきやすさから習得プロセスを唱えたアスペクト仮説は、第一言語(以下、L1)及び第二言語(以下、L2)両方において世界的に検証され、普遍性が高いとされている(Andersen & Shirai 1994等)。日本語をL1とする幼児(以下、L1 幼児)、及び日本語をL2とする成人(以下、L2 成人)においては検討されているものの、日本語をL2とする幼児(以下、L2 幼児)については検討されていない。本研究では、L2 幼児の習得プロセスがアスペクト仮説の予測と一致するのかを検討した。アスペクト仮説の普遍性の検証の一環として行ったものである。

2. 先行研究

2.1 アスペクト仮説の定義

アスペクト仮説(Anderson & Shirai 1994)によると、学習者はインプットから動詞形態素のもつ意味を類推し、その意味に最も近い内在アスペクトをもつ動詞¹を選び使用するという。過去を表すタ形(以下、タ)は、初期段階で、限界性、瞬間性のある到達動詞と結びつき、その後、達成動詞、活動動詞と結びつくようになる。進行形のテイル形(以下、テイル)は、初期段階で、持続性のある活動動詞と結びつき、達成動詞、到達動詞と結びつくようになる。テイルは、初期段階で、動的でない状態動詞とは結びつかない。こういったアスペクト仮説に基づく習得パターンは、プロトタイプ理論²(Rosch 1973)にて説明されている。タと到達動詞、テイルと活動動詞の結びつきがプロトタイプとされ、早期に習得されるというものである。

2.2 日本語のテンス・アスペクトの習得研究

テイルの習得は、アスペクト仮説に基づく解釈では、最初に活動動詞、達成動詞と結びつき「継続」が先に習得され、後に「結果の状態」が習得されるということになる(Shirai 2002)。L1 幼児とL2 成人を対象とした研究において、アスペクト仮説をほぼ支持する結果が得られている(魚住 1998; 許 2001; 小山 1998; Shirai 1993; Shirai & Kurono 1998等)。

3. 研究目的と研究課題

本研究は、L2 幼児のタ、テイ³の習得プロセスがアスペクト仮説の予測と一致するのかが、また、ルはどの動詞タイプと結びつきが強いのかを明らかにすることを目的とする。また、併せてインプットの調査を行い、習得プロセスにおけるインプットの影響についても検討する。

3.1 研究課題 1

研究課題 1. タ、テイの動詞形態素ごとの動詞タイプ(状態、活動、達成、到達動詞)の使用頻度の傾向は、アスペクト仮説の予測と一致するか。ルはどの動詞タイプの使用頻度が高いか。

1a. タは、初期段階で、到達動詞の使用頻度が最も高いか。

1b. タは、到達動詞→達成動詞→活動動詞→状態動詞と次第に使用が広がっていくか。

1c. テイは、初期段階で、活動動詞の使用頻度が最も高いか。

1d. テイは、活動動詞→達成動詞→到達動詞と次第に使用が広がっていくか。

1e. テイは、初期段階で、状態動詞につくことはなにか。

1f. ルは、初期段階で、どの動詞タイプの使用頻度が高いか。

3.2 研究課題 2

さまざまなインプットの中で被験児 K 児が明らかに注意して耳を傾けていた幼稚園の担任教師の発話に焦点を絞り調査を行う。但し、担任教師の K 児個人に向けられた発話と、クラス全体に向けられた発話と異なる可能性があるため分けて検討する。

研究課題 2. K 児が使用したル、タ、テイの各動詞形態素と動詞タイプの高い使用頻度の結びつきは、インプットにおいても同様に使用頻度が高いか。

2a. 担任教師のクラス全体に向けられた発話に、K 児の発話と同じ傾向がみられるか。

2b. 担任教師の K 児個人に向けられた発話に、K 児の発話と同じ傾向がみられるか。

4. 研究資料

4.1 本研究全体に使用したデータ

被験児 K 児は、2003 年春に来日し 4 月より日本の幼稚園に通いだした女兒である。英語母語話者で、調査時の K 児の年齢は 3 歳 6 ヶ月～4 歳 4 ヶ月である。K 児来日後約 6 ヶ月目の 2003 年 9 月から 2004 年の 7 月まで観察を行った。1 回の発話調査は 1 時間～3 時間とした。2 週間に 1 度(2004 年 2 月のみ毎週の観察)を基準に、K 児の自然発話を録音し、併せて発話メモをとった。

4.2 研究課題 2 に使用したデータ

録音データより担任教師の発話(つまり K 児の耳に届いたと判断される発話)を抽出した。担任教師のクラス全体に向けられた発話については初期に長く産出されていた 11 月 17 日のデータを、K 児個人に向けられた発話については初期の 9 月 30 日、10 月 17 日、11 月 17 日のデータを使用した。

5. 分析方法

5.1 研究課題 1 について

1. 文字起こしした発話データよりル、タ、テイを使用している文を抽出した。

2. ル、タ、テイの各動詞形態素に使用されている動詞を判別テスト(Shirai 1993, 1998)に基づいて 4 つの動詞タイプに分類しコーディングした。

3. 1 ヶ月ごとに各動詞形態素の動詞タイプの使用頻度を算出した。使用頻度は、ル、タ、テイそれぞれについて、1 ヶ月ごとに、各動詞形態素を使用した発話文の総産出数に対する各動詞タイプの使用数の割合を算出した。さらに、1 ヶ月ごとに各動詞形態素を使用した発話文の動詞異なり語数に対する各

動詞タイプの異なり語数の割合をも算出した。

5.2 研究課題 2 について

1. 担任教師のクラス全体に向けられた発話、K 児個人に向けられた発話から、ル、タ、テイを使用した文を抽出する。

2. 使用されている動詞を判別テスト(Shirai 1993, 1998)に基づいて、4 つの動詞タイプに分類しコーディングした。

3. ル、タ、テイそれぞれについて、各動詞形態素を使用した発話文の総産出数に対する各動詞タイプの使用数の割合を算出した。さらに各動詞形態素を使用した発話文の動詞異なり語数に対する各動詞タイプの異なり語数の割合をも算出した。

6. 分析結果⁴

6.1 研究課題 1 について

研究課題 1a. タは、初期段階で、到達動詞の使用頻度が最も高いか。

最初の調査月である 9 月に到達動詞の使用頻度 100%を示す。異なる動詞 5 つ以上とともに産出された 11 月を生産的産出時⁵と考えると、11 月は到達動詞の異なり語数の使用頻度が 45.5%で 1 番高い。初期段階で、タの使用頻度の最も高い動詞タイプは、到達動詞といえる。

研究課題 1b. タは、到達動詞→達成動詞→活動動詞→状態動詞と次第に他の動詞タイプにも使用されるようになるか？

出現順は、9 月に到達動詞、10 月に状態動詞、11 月に活動動詞、1 月に達成動詞となっている。延べ語数をみると、状態動詞の使用頻度が高い時期(10 月 100%、11 月 50%、3 月 54.5%、4 月 52.2%)があり、後半は圧倒的に到達動詞の使用頻度が高く、50%前後を示す。また、異なり語数でみると、10 月、12 月を除くと、到達動詞の使用頻度が 1 番高く、11 月、4 月以外は 50%を超える。アスペクト仮説の予測では、タと到達動詞の結びつきは徐々に減少する傾向があるはずであるが、11 月の生産的産出時から考えると、異なり語数の使用頻度は、11 月 45.5%、12 月 25%、1 月 62.5%、2 月 53.3%、3 月 50%、4 月 33.3%、5 月 58.6%、6 月 60%、7 月 56.5%と減少する傾向はみられず、他の動詞タイプへと使用がそれほど拡がっていないということになる。

研究課題 1c. テイは、初期段階で、活動動詞の使

用頻度が最も高いか。

テイは、10月から出現し、延べ、異なり語数ともに活動動詞と達成動詞の使用頻度が同率で50%を示す。11月をみると活動動詞の使用頻度が100%となっている。10月と11月両月を通じてみると、活動動詞の使用頻度が最も高いということになる。異なる動詞5つとともに産出された1月を生産的産出時と考えると、1月は活動動詞の異なり語数の使用頻度が60%で1番高い。初期段階で、テイの最も使用頻度の高い動詞タイプは、活動動詞といえる。

研究課題 1d. テイは、活動動詞→達成動詞→到達動詞と次第に他の動詞タイプにも使用されるようになるか。

出現順は、活動動詞10月、達成動詞10月、到達動詞1月となっている。1cの結果より、最初は、活動動詞の使用頻度が最も高い。12月は異なり語数で活動動詞と達成動詞が同比率であるが、延べ語数では達成動詞が活動動詞を上回り83.3%で1番使用頻度が高くなる。到達動詞の産出は1月になってからであり、最初は延べ語数7.1%、異なり語数20%を示すが、異なり語数では4月以降、他の動詞タイプよりも使用頻度が高くなる。したがって、テイは、活動動詞→達成動詞→到達動詞と使用が広がっているといえる。生産的産出時からの活動動詞の異なり語数の使用頻度は、1月60%、2月57.1%、3月50%、4月40%、5月31.3%、6月33.3%、7月20%とほぼ減少していく傾向を示し、使用が他の動詞タイプへ広がっていることがわかる。

研究課題 1e. テイは、初期段階で、状態動詞につくことはないか。

状態動詞の使用は1回のみで、調査後期である6月に確認される。この結果からテイは初期段階で状態動詞につかないといえる。

研究課題 1f. ルは、どの動詞タイプの使用頻度が高いか。

状態動詞の使用頻度が3月まで他の動詞タイプの使用頻度よりも常に高い(活動動詞、達成動詞、状態動詞の異なり語数が同数である12月を除く)。異なる動詞5つ以上とともに産出された1月を生産的産出時と考えると、1月は状態動詞の使用頻度が一番高い(延べ語数61%、異なり語数50%)。初期段階で、ルの最も使用頻度の高い動詞タイプは状態動詞であるといえる。

6.2 研究課題2について

研究課題 2a. 担任教師のクラス全体に向けられた発話に、K児の発話と同じ傾向がみられるか。

ルは、状態動詞と到達動詞と結びつきが強く、異なり語数においては50%で同率であるが、延べ語数において状態動詞の方が上回る。また、タは状態動詞の使用頻度が高く、異なり語数55%、延べ語数77%を示す。さらに、テイにおいては、到達動詞の使用頻度が最も高く、延べ語数では64%、異なり語数では50%を示す。K児の初期段階でみられたルと状態動詞、タと到達動詞、テイと活動動詞との強い結びつきはみられなかった。

研究課題 2b. 担任教師のK児個人に向けられた発話に、K児の発話と同じ傾向がみられるか。

ルは状態動詞との結びつきのみで100%を示す。タは、到達動詞の使用頻度が一番高く、延べ語数、異なり語数ともに75%で、テイについては、活動動詞の使用頻度が一番強く、延べ語数で89%、異なり語数で75%を示す。ルと状態動詞、タと到達動詞、テイと活動動詞との結びつきが最も強く、K児の初期段階における傾向と同じといえる。

7. 結果・考察のまとめと今後の課題

研究課題1では、タと到達動詞、及びテイと活動動詞の強い結びつきと、テイの使用の広がりにおいて、L2幼児の習得プロセスがアスペクト仮説の予測と一致することが確認された。タの使用の広がりには明らかにされなかった。タと到達動詞の一貫した強い結びつきは、タがまだ習得初期に相当するということが考えられる。今後アスペクト仮説の予測どおりに柔軟に他の動詞タイプと結びついていく可能性はある。また、延べ語数においてタの状態動詞の使用頻度が高い時期があったが、L1習得においても同様の現象が報告されており(Shirai 1998)、丸暗記の固まり習得による産出と考えられる。ルについては、状態動詞と結びつきが強いことが確認された。研究課題2では、担任教師のK児個人に向けられた発話に、K児の発話と同様の傾向がみられた。L2幼児がインプットからプロトタイプを形成するという可能性を支持する結果となった。また、インプットの中でも、個人に向けられたインプットが習得に影響を及ぼすということが考えられる。

本研究は被験児1名を対象とした事例研究であり即座に結果を一般化できない。何が習得を促進するのか、習得メカニズムの解明に向けて多角的かつ綿

密な研究を重ねていきたい。

注

1. Vendler(1967)の内在アスペクトに基づく動詞 4 分類は、状態動詞[-動的性,-限界性,-瞬間性]、活動動詞[+動的性,-限界性,-瞬間性]、達成動詞[+動的性,+限界性,-瞬間性]、到達動詞[+動的性,+限界性,+瞬間性]である。
2. プロトタイプ理論(Rosch 1973)は、人間のカテゴリー認知の仕方に関するモデル、つまりカテゴリーは中心的(プロトタイプ)成員と周辺の(非プロトタイプ)成員から成り、それらは連続性をもってカテゴリーを構成するという考えに基づくものである。
3. 幼児の場合異形態による産出がほとんどであるため、Shirai(1998)に倣い、次記表現を研究対象としテイと称す。(1)V てる、(2)V てない、(3)V てて、(4)V てんの、(5)V てた。
4. 本稿では、紙面の都合上、実数を含む時系列の表提示が不可能なため、パーセンテージの結果のみ提示する。
5. 異なる動詞 5 つ以上と共に産出された時を生産的時とし、生産的産出がなされているかどうかの 1 つの目安とした。

参考文献

- 魚住友子 (1998) 「追跡調査に見られる『～ている』の習得状況」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成 7～9 年度科学研究費報告書 100-111.
- 許夏珮 (2001) 「日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得に関する研究」お茶の水女子大学大学院博士学位論文
- 小山悟(1998) 「日本語学習者のテンス・アスペクトの習得」第 9 回第二言語習得研究会全国大会発表原稿、名古屋大学 12 月 20 日
- 菅谷奈津恵 (2001) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究: テイルを中心に」お茶の水女子大学大学院修士論文
- 堀口純子 (1981) 「年少児のアスペクト」堀素子・F.C. パン編 『言語習得の諸相』文化評論出版株式会社 166-183.
- Andersen, R. W. (1991) Developmental sequence: The

- emergence of aspect marking in second language acquisition. In Huebner T. & Ferguson, C.A. (Eds.), *Crosscurrents in Second Language Acquisition and Linguistic Theories*. Amsterdam: John Benjamins, 305-324.
- Andersen, R. W. & Shirai, Y. (1994) Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 133-156.
- Bardovi-Harlig, K. (1999) From morpheme studies to temporal semantics: Tense-aspect research in SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 341-382.
- Bardovi-Harlig, K. (2000) *Tense and aspect in second language acquisition: Form, meaning and use*. Oxford: Blackwell.
- Ishida, M. (2004) Effects of recasts on the acquisition of the aspectual form -tei(-ru) by learners of Japanese as a foreign language, *Language Learning*, 54, 311-394.
- Rosch, R. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories, In Moore, T.E. (Ed.), *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, NY: Academic Press, 111-144.
- Shibata, M. (1999) The use of Japanese tense-aspect morphology in L2 discourse narratives. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 2, 68-102.
- Shirai, Y. (1993) Inherent aspect and the acquisition of tense-aspect morphology in Japanese. In Nakajima, H. & Otsu, Y. (Eds.), *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*. Tokyo: Kaitakusha, 185-211.
- Shirai, Y. (1998) The emergence of tense/aspect morphology in Japanese: Universal predisposition. *First Language*, 18, 281-309.
- Shirai, Y. (2002) The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. 『第二言語としての日本語の習得研究』第 5 号, 42-61.
- Shirai, Y. & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48, 245-279.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.